

英国紳士に仕立てる教育

桜も散り、水温むこの季節になる。私は学生時代に経験したボート・レースのすばらしさを懐かしく思い出す。たまたま三月二十九日

(金)の夜九時十五分から、NHKで「ロンドン・父を見つめる追憶の街」という番組を見た。内容は作家の安部譲二氏の波瀾万丈の来歴を紹介するもので、私は特にボートの場面に感動した。

チームズ河上流のボート・レースの盛んな街(名称失念)の清楚な風景、そのまばらしい自然のなかで、アメンボウのようにスイスイと快漕していくスカルや、八人のオールが調子よく揃って、巨大な艇が悠々とすすんでいくエイトの雄姿、これらが頻りに行き来する風景を見ていると、若き日の血が湧き肉の躍る憶いであった。しかし私が感動したのはこれらの風景だけではなかった。

安部譲二氏の父君が息子をブリティッシュ・シェントルマンに仕立て上げようとした教育の精神であった。譲二氏

も父君の赴任先(ロンドン)に同行し、英国に留学した。

そして父親からボート部に入ることを強く奨められた。その理由は「ボートにはスターがうまれないからだ」ということだった。確かにボートか

ボート競技に教育の原点見たり

らはスターはうまれてこない。それは団体競技だからではない。その証拠に、団体競技である野球やサッカーからはいくらでもスターはうまれている。

「スタンдрプレー」とは

なぜボートからはスターがうまれないのだろうか。私には三つのことが考えられる。

第一に、ボートは野球やサッカーとは違って、狭い一定のコートの中でおこなわれるものでなく、東京周辺では隅田川や荒川、京都周辺では瀬田川といった広範囲の自然を舞台にしておこなわれるものであるから、文字通りに「スタンдрプレー」とは無縁なのである。

第二には選手のポジション

の役割が、ボートでは余り大きな差がないということである。もちろん微妙な差がある。コックス(舵取り)を除いて、ピッチの上げ下げに巧みな者が八番(整調といひ、

で、個々人の動作はわからない。

第三に、艇全体のスピードは個々人のスピードの累積とか合計で出てくるものではなく、一番手抜きをしている遅い者のスピードに全体のスピ

っているのである。

「素晴らしい金銭絡みの大志以上のようなボートのメカニズムと教育精神とを見抜いた安部譲二氏の父君の慧眼には脱帽せざるを得ない。学生

論 正



社会心理学者 辻村 明

コックスと対面して座る)、七番(逆サイドの先頭)、以下、体力があって推進力になる者が六番、五番、四番、三番と占め、最後にバランス感覚に敏感な者が二番と一番(バアウといひ)とに座る。しかし外から見ている限り、同じ動作を一齐にやっているのだから、全体が揃っているかどうかだけがわかるもの

ードは落ちてしまうというこである。しかも手抜きしているか否かは本人が良心に問う問題であって、外から見てもわからない。要するにボートにおいては、目に見えない、水中でのオール捌きが勝敗を決定するものであるから、「スタンдрプレー」や「スター」とは無縁のものとなり、清々しいスポーツとな

時代にスポーツによって、肉体と精神とを鍛錬しておくことは必要である。しかし最近の学生スポーツは職業スポーツへの登竜門の役を果たしている、スター選手が続々と下リードされて、億といった単位の金銭にありついていく。「少年よ、大志を抱け」(クラーク博士)は結構だが、巨額な金銭が絡みつく大志など

スター出すだけがスポーツにあらず

は捨てた方がよい。その意味で、マスコミ各社、特に産経新聞にはボート支援の提案をしてみたい。ボートに人気が集まらないのは、艇が速すぎて一瞬のうちに通過してしまいうからである。時速約三〇時に達するので、自転車と追わなければ追いついていけない。そこでレースのおこなわれる隅田川や荒川、もしくは関西の瀬田川に、レースの長さ二〇〇〇mに合せてトロコックのレールを敷き、レースのときにのみ十輛連結くらいのトロコックを走らせる設備を作って貰えばいいのである。僅かな資金ですむであろう。巨大な資金を使って、野球やサッカーやゴルフのスターづくりは盛んであるが、ボートレースを応援する新聞社は一社もない。まさにこれは産経の担つべき「正論」路線ではなからうか。拜金主義を拒否して、「ノーブレス・オブリージ」(身分の高い者は剛勇・高潔といった徳を備えるべし)を共に求めていくものだからである。(つじむら あきり)